

■ 「八ヶ岳・車山 スノートレック組」

記録：古林

■ 日程:2014年1月12日(日)

■ パーティ:L.中道、浜口、萩原、西田、斎藤(幸)、古林

■ 行程:山花開宿泊 & 懇親会 & 山行(山開花～車山肩～物見の像)

東西南北ぐるりと一望の景勝地

八ヶ岳中信高原国定公園霧ヶ峰高原は主峰の車山(1,925m)から噴出した溶岩によって出来た広大な高原で、あたり一面を遮るものが無く、富士山を始め北アルプスから南、北、中央アルプス全てを一望できる景勝の地。また、四季夫々に違った趣があつて、じっくりと時間をかけて自然の景観を味わうには最適の場所ということが出来る。冬は風さえなければ平坦な地形なので、スノーシューにはもってこいのところで、スキーヤーやスノーボードの客も以前ほどの賑わいは無く、緩やかな起伏を静かに歩いて安全にスノートレッキングを楽しむことが出来る。

ここには幾度か来たことがあるが、今回はスノーシューでのトレッキング。車山から物見の像を経て、八島湿原まで行って戻ってくる計画である。標高差300メートル程度で、平坦だが地図上では往復で約6.5キロの行程となっている。



寒くて風が強い、防寒対策をバッチリ

今回は、赤岳から横岳、硫黄を回るA班と、車山から八島湿原まで歩くB班の2組に分かれての合同山行である。B班の方は中道リーダーをトップに萩原、斎藤(幸)、西田、浜口のシニア6人がメンバーを構成する。

一夜を豪華な晩餐会のうちとけた談笑で過ごし、久しぶりで女性人が作る充実した朝の食事を終えて6時過ぎに山花開を出発。未だ太陽が地平線の下方にある中で、真っ暗な雪道を車が前方に向かって動き出した。車道は雪で凍結してガチガチと音がする感じ。富士見台の展望コーナーで富士山に向かってシャッターを切ったあと、薄暗がりの中をのりくらの運転で7時26分に車山肩に到着して車を止め、山頂に向かって歩き出した。

朝は未だ陽が出たばかりで温度は上がってこない。恐らくマイナス14～5度だろうと思う。今日は予報では雲が厚く、午後からは天気も下り坂となっていたが、雲はそれほどでもないが風が強くて顔が痛い。防寒対策としてネックウォーマーにダウンベストとウインドブレーカー、それに冬用の厚手のトレッキングパンツを履いて肘まで届く長い手袋を2重に重ねる。冬用の帽子を耳の上に被せて、さらにゴーグルをかけて、もう何処にも隙間が無いのだが、向いの風が吹くと顔の一部がイッタイと言う按配だ。

物見の像で退却

車山の肩から歩き出してから少し勾配があったが、それを乗り越えると1,925mの車山頂。そこには気象レーダーがある。さらにその先には蝶々深山(1,836m)があるが、平坦な雪面にトレースが雪で埋まってルートが良く見えない。ロープを張った杭があるのだが、その杭の頭しか所々に見えていない。杭の高さは記憶では1m前後あったように記憶しているが、それも所々で雪に埋まってしまって隠れてしまっている。恐らく積雪が1メートル前後なのだろう。その頃から風が強吹いてきた。外気温はマイナス15度前後だがアゲインストの風が吹くと5度以上の気温差になるから、顔のネックウォーマーの隙間が痛く感じられる。ルートは先行者の中道さんが踏み固めて進んでいるが、時々、足が雪に深く嵌ってよろけて倒れそうになる。アイゼンでのラッセルするような難行苦行ではないがそれでも先行者には負担がかかる。西田さん始め何人かがひっくり返って雪だるまになった。



＝ 富士見台から富士山を臨む ＝

景色を楽しむには少々風が強く、八島湿原まで行く予定だったのが、物見の像が見える手前まで行ったところで、後の事を考えると無理をすることも無かろう、戻ろうと言う話になって、引き返すことにした。風の吹く中、バイパスを通過して今度は山頂には登らずに車山肩に向かった。到着時刻が12時02分。出発から凡そ4時間半が経過していた。

帰りのバス考

私は1人、ここで皆と別れて新宿まで戻ることになった。急遽、大学の同期会が招集されたので止むを得ず1日早く撤収することにしたのである。ビーナスラインに乗って車山肩から白樺湖にあるバス停に送ってもらった後、そこで10分も待っていると茅野駅行きのアルピコバスがやってきた。

気象庁に勤めていた諏訪市出身作家の新田次郎はビーナスラインの有料道路建設に反対をした人たちの話を小説「霧の子孫たち」に残した。このビーナスラインが出来たことでアクセスが簡単になった反面、失われたと言う「この地に立つ感動」が惜しまれる。が、しかしその一方で多くの人々が交通至便の恩恵に預かっていることも事実である。私もその1人だが、今回は慌ただしく駆け抜けて、ポロコックルヒュッテをその傍らを通り過ぎながら様子を伺うだけで中に立ち寄ることもしなかった。‘今度また来ます’と言いながらそのままにしているのが心残り。交通至便となって何度も訪れて自然と戯れることが出来る反面、じっくりと時間をかけた味わい方が出来なくなった自分がその対極にいる。



(古林 記)